座談会　峠の向こうに希望が見えた！

―第 18 回・全国教育研究交流集会（長野）に参加して―

去る 1 月 23 日～24 日長野市において、民主教育研究所と長野現地実行委員会の共催で全国教育研究交流集会が開催されました。ぐんま教育文化フォーラムからは運営委員７名が参加、その様子を語ってもらいました。なんと、次回来年は、この研究交流集会をわが群馬で開催することになりました。群馬では、いかに？

＜全体会はどうでしたか＞

提起　「地球時代の新段階と教育課題」
（堀尾輝久・民主教育研究所代表）
構成劇　「地域に根ざす長野の教育」
シンポジウム　「地域にとっての学校、学校にとっての地域」
パネラー　池上洋通（自治体問題研）
高橋彦芳（栄村前村長）
宮下与兵衛(県立赤穂高校)

◆信濃教育の厚み、心意気

内藤真治：民研の研究交流集会が組合の全国教研集会とどう違うかと言えば、元々この民主教育研究所は教育学を研究している学者の団体みたいなところがあって、アカデミックな研究会という感じでした。4 年前に地域の民研と共催するようになって変わってきました。今年の長野集会では、信濃教育の厚みを感じましたね。典型的に出たのが、長野県教育委員会が後援をし、協賛団体に 26 団体もがズラッと名前を連ねている。県民性として文化とか教育を大事にする風土があるなあと思いましたね。中心になったのは「信州の教育と自治研究所」ですが、すごい底力がある。群馬がそのレベルに行くのは大変だなあと感じました。

全体会に先立つ企画の映画『草の実―２・４事件の教師たち』は、いろんな意味で考えさせられ、勉強になりましたね。

桑原芳美：私も、『草の実』という映画を見て、三浦綾子著『銃口』を思い出しました。映像による信濃の教育の歴史を知りました。それから長野は県立〇〇高校って言わない理由がわかりました。自分たちが作った学校だから、別に県立ってつけてくれなくていいよという長野県の市民とか地域の人の心意気よね。学校は地域が作るんだという、地域との結びつきが全然群馬と違う。これが長野の教育の根の深さなんだというのを感じました。

◆　私の描いた夢が長野で実現

冨田英子：長野はいろんな思いがある所なんですが、(高校教育研究所の時に) 辰野高校の三者協議会の見学に行きましたよね。私は組合の女性部長だった時に、長野から家庭科の先生をよんで講演してもらって、群馬でも男女共修を早く実現しようと学習会をしたことがあります。長野はすごく雪が深くて大変厳しい風土の中でも、栄村のような小さな町で住民自治をちゃんとやっている。そして信濃教育の伝統・・・そういうものが今回の

教研に参加して全部結びついたんですよ。住民自治とか住民主権というのがうんとほど遠い目標だと思っていたのですが、そんなことはない。長野でやれているんだから、群馬だってやれるんだ。伊藤千尋さんが、昨年の「５・３憲法集会」で「コスタリカでは魚屋のおじちゃんが憲法を語る」ということを聞いて、そんなの日本では無理だと思っていましたが、構成劇「地域に根ざす長野の教育」やシンポジウムで今日の長野のパワーに圧倒され、群馬の（フォーラムもかな）目標が明確になり、すごく感動しました。

◆そこで育ち、そこで学ぶ

加藤彰男：栄村の村長さんの話を聞いて住民自治というのはこういうことなんだなと感心しました。住民自治というのは教育と同じだよ、そこで育ち、そこで学ぶんだという言い方をされましたね。ちょうど今「いせさきの教育をよくする会」をやっていますが、まだ運動を始めたばかりで、それが伊勢崎市政を動かすまでにはどこまでかかるかわからないけど、ひとつの試みにはなるかなと思っています。

◆市民として、教師とは違う視点で

藤原麗子：私の参加理由をお話しします。私はフォーラムの運営委員ですが、一市民で教育者としての経験が全然ないので、案内をいただいた時にためらいがありましたね。「研究」という名前の集会に一市民が参加していいのだろうか、専門的な話が飛び交っていて話の内容がわかるんだろうか。考えた末に、唯一参加してみようと思ったのは、全体会のパネラーに栄村の村長さんのこと（実践的住民自治の立場で「小さくても輝く自治体づくり」を 20 年間実践）が目に入って、こういう村でどういう実践をしたのだろうかということが気になって、じゃのぞいてみようとおっかなびっくりで参加しました。

参加してみて、一番は、やはり栄村の村長さんの実践がすごいなと思いました。あんな小さな村で、村長だけでなく村をあげて村づくりをやってるというのが。

◆学校の外で教育とどうつながるか

丸山典子：私は藤原さんみたいに深く考えずに、わかるのかなという心配もあったのですが、みんなで新年会も兼ねて行こうと誘われたので、じゃ行っちゃえと軽いのりで参加しました。行ってみて全体会ですごくよかったのは、地域とのつながりというのがテーマにあって、学校の中だけの話じゃなくて外で教育がどうつながっているのか、いろんな話があって、私自身も教育とは関わってこなかったけど、地域の住民であるということで関わっていけることが確かにあるんだなということがわかったのは大きな収穫でした。

＜分科会で印象に残ったことは＞

◆若い先生の仲間づくり

加藤：私の出た第３分科会「学力問題と教育課程」は二つの柱があって、一つは学力問題。学テ体制で学力格差が大きくなる、それをどう克服していくか、そのためにどういう授業をつくるのか。もう一つは、文科省から出されたすべての教科での道徳教育に対して、私たちがめざす道徳観とはどういうものか。今印象に

残っているのは、6 年目の小学校の先生の「授業づくりと自主的サークル」。最初は、学習指導要領どおりやらなくちゃいけないと思って、しかも管理職の眼を気にして失敗を怖れて型どおりに流していくので、結局子どもたちは？…で悲惨な状況に追い込まれていった。どうしようかと民間教育団体の実践を知って、教科書とは違う新しい体育の授業をやっていくと子どもたちが生き生き成長していく。それを自分一人の問題じゃなく職場の中で若者たちが集まってしゃべって自主的なサークルができ、そこで成長していく。現場の中で子どもたちの実情に合わせて教材や授業の展開を工夫していく、自主編成の原点みたいなことを若い先生たちが始めているんですね。

◆正規雇用に頼っていられない？！

倉林順一：私は、この時、高校で就職開拓員の仕事をしていたので、第 5 分科会「子どもの貧困と若者の進路」に出ました。一番議論がわいたのは、大阪の定時制高校の先生の報告でした。経済的に大変だったり不登校だったりで生活の面倒も大変なんですが、進路指導をどうやっているかというと、もう正規雇用に頼っていられない。非正規雇用みたいなところで生きていくことを教えていかないと現実的に彼らの卒業後の生活が成立しないこともある。非正規雇用で働いた時にどんな大変さがあるかとか、場合によっては生活保護をどうやって受けるのか、そういう手だてまで含めて、実際の生活方法を教えていくという刺激的な話でした。会場からは、学校現場が問題のある非正規雇用を進めていくのはどうか？という意見も出されて考えさせられました。

◆長野の創造的な家庭科男女共修

冨田：第 7 分科会「ジェンダー平等教育の創造」ですが、特に興味深かったのは、「長野県における男女共修家庭科一般の実践と課題」と「新しい政治動向とジェンダー平等教育の課題」というレポート。長野県の殆どの家庭科の先生が教文会議（組合活動とは別に教科や教育の課題を考える組織）に入り、家庭科の教育課程、男女共修、教科の内容等を今日まで実践してきたまとめと今後の課題が提起されました。とりわけ、検定教科書を離れて新教科「総合技術」を自主編成したことは注目に値するものでした。

◆第 10 分科会「憲法・平和と教育」

内藤：5 本の報告のうち 4 本が長野。長野の平和教育実践が進んでいるのは、学校の校務分掌の中に「平和人権教育」が位置づけられているからですねえ。

藤原：塩尻西部中学校の修学旅行で松代大本営跡と無言館を見学して、その成果を文化祭で創作劇と踊りにして発表した報告が印象的でした。真田十勇士が語り手になって松代を訪ねるという中学生らしいシナリオで、戦争とは、生きるとは、と生徒自身が考えているんですよ。

丸山：私は、個々のレポート以上に、教師たちの話を聞いて、教育現場が身近に感じられました。今までドア越しだったのが、カーテン越しぐらいになったかな。でもこの分科会こそ、私たちみたいな教師以外の地域の人に参加してほしかったのにと残念です。（司会・文責：瀧口典子）